成形圖說

農事部 五

145
30
1

東京圖書館

和書門	農書類	一五函	二〇架	一九號	三の冊
	一四五				

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1

ガラス使用

成形圖說卷之五

目錄

稼穡（カリトリ）
登場（イナバ）
穀禾（モミホ）
米粒（ヨネツブ）
糧糒（カテカレヒ）
糙秤（モミヨメニラケヨヲ）
粃糠（ニヒナセカラ）

附麥笂（イヌムタ）
附糯糅（ヤキヨメトノ）
附糒秤（ニハキノコリシヲ）
附老米（アラコノ）

TOKIO ACADEMY FOUNDED BY MOMBUSHO
東京書籍館
明治八年文部省交付

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

成形圖說卷之五

農事部類

稼穡

刈取（カリトリ）績紀○倭姫世紀先穂抜穂令抜半分大税（ミツギ）令刈云々抜穂ハ細税ニシテ大刈ヲ大半トスル古事記ミハ鎌ノ字ヲ加留（カル）ト訓ル又竹ヲ以テ刈ル方ヲ刈（カリ）ト云ヒ或ハ某把某束某秉某升蒔ト同シ國郡ヨリ田産ヲ以テ數ヲ歩ヲ以テ刈ル方ヲ刈田（カリタ）トイフ建武式目苅田狼藉事為検断方沙汰可有糺明之所犯令露顕者可被召放所領三分一歟是其厳制知ル

刈上（カリアゲ）取上ト某ノ上ヲ略ノ詞多シ凡俗物ヲ納メ訖ルヲ刈上ト云

稼穡書土爰稼穡○文遅藉田財賄也勧穡以足百姓所以固本也○説文禾之秀實為稼莖節為禾詩十月納禾稼又曰稼家事也按ニ是稼ト訓ル事ノ上ノ事ノ如キニ似タリ

穡書土爰稼穡○文遅藉田財賄也勧穡以足百姓所以固本也○説文禾之秀實為稼莖節為禾詩十月納禾稼又曰稼家事也按ニ是稼ト訓ル事ノ上ノ事ノ如キニ似タリ

斂穫家語注

收穫農書

穫刈講徳論

刈清耕織圖

蕃名コトルンインヨーステンシン牧コールンインデシ

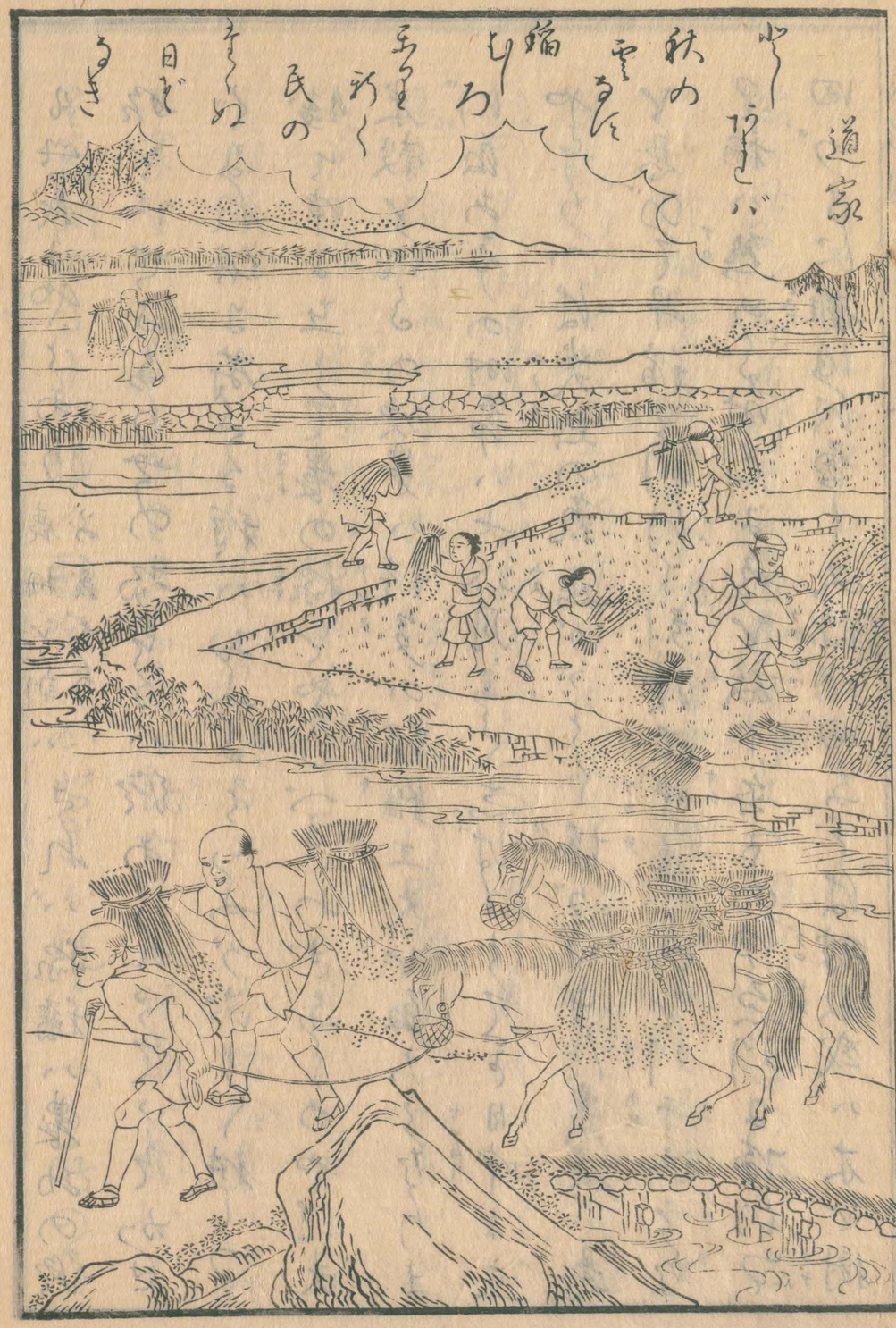
国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

キユールハアレン　穫

稼ハ母よハ、志通計と云農事を作ると
いけ州西あど唱へ里今幼子僮僕よ教育をふし又禮制を
習ふもと云ふもこれけるとおれし禮制ハ儀式作
法のるや肉禮儀よ失ヤ不作法とい
ふ論語ふも學稼ふと云ふ老農よ志かぞそふ
ふら俗よ生理をかせぎと称て称字を用うかせぎと云
言握集物よあらればふるき清ふるべしお語拾遺に拵
の字をかせぎと訓ヨ当ふ動かして学事と言ムよ
里義訓やるまや職人歌合にかせぎが辻占つる所の名

も此義まやとあり（鹿柵を訓ハお義あり）
始をはせるふら学の物をふる八俗あ
ぐるれ俗よ苅ふる程ハおふるとふ
傳ヤ中よ立て農の稼ともやしべきわざふるめやは夫
米穀をれるの次第ハ許多の艱難工夫を爲ふるまで
げ爲あるの時第ハ七八月ふくふ志ばらくを日中よ立
やふらへは炎熱の氣烝がづくふく堪ぐふるに農夫ハ是
を恐びて早稲を刈引漬て中ふるものを刈干ふとな
里稲ハ熟める時已よみを放しておのゆ忌刈よ懐いて
田づくに攤ほ日一又涂沼田ふるは晴或ハ木を樹

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

刈(カリ)て束(タバ)ね上(アゲ)よき程(ホド)を有(アル)て奥(オク)なき處(トコロ)
に積(ツミ)置(オキ)ば一霜(ヒトシモ)二霜(フタシモ)なほ後(ノチ)〳〵まで實(ミ)なく實(ミ)り里(サト)
〳〵熟(ウレ)るを待(マチ)て刈(カリ)るときは枕(マクラ)許(バカリ)より八月(ハツキ)つ
ごもりぐらゐに春隆(シュンリュウ)と詣(イヅ)て見(ミ)まはゞ稲田(トウデン)は
人多(ヒトオホ)くて忙(イソガ)はしく稲刈(イネカリ)るなりもあり
ども亦(マタ)この如(ゴト)くまたいと赤(アカ)き稲(イネ)のみを刈(カリ)はかりて刀(カタナ)
をとゞめ落(オチ)ほのやもぐに交(マジ)りてこぼれ居(ヰ)る事(コト)
〳〵ふびんなりや穂(ホ)を上(ウヘ)まで並居(ナミヰ)るいとおりふしゆえ
八月(ハツキ)は稲葉(イネバ)色(イロ)づきて九月(ナガツキ)とは呼(ヨブ)べる
稲(イネ)の刈(カリ)上(アゲ)田(デン)の實(ミ)ある乃(ノ)要時(ヨウジ)あり續貫(ツヾキ)約(ヤク)は稲(イネ)の色(イロ)づく
ま八穂(ホ)ばかり赤(アカ)〳〵み葉黄(キバ)むこと薫梅色(クンバイイロ)となる秋八月(アキハツキ)より
九月(ナガツキ)まで降(フ)り陰氣(インキ)上(アガ)りて月(ツキ)澤(サハ)き風(カゼ)身(ミ)に深(シミ)通(トヲ)る地
下(ヂカ)十一月中(ジフイチガツチュウ)より一陽起(イチヨウオコ)るまで十月(トツキ)は地中(チチュウ)暖(アタヽカ)
なる氣(キ)を得(エ)ざる也(ナリ)此十月(コノカンナヅキ)草(クサ)も梅(ウメ)も木(キ)の葉(ハ)謝(チ)ておち
陽氣(ヨウキ)上(アガ)るにつれ〳〵稲(イネ)を赤地(アカヂ)の陽葉(ヨウヨウ)と称(ショウ)し
根心(ネジ)は哀(カハラ)ざるゆえ刈(カリ)後(アト)落穂(オチボ)より稗(ヒエ)生(オヒ)て然(シカ)ども
地上(ヂジョウ)の陰氣(インキ)強(ツヨ)く露(ツユ)深(フカ)くて霜(シモ)とまるまで冷(ヒヤ)かなる
まで稔(ミノ)らず赤(アカ)き葉(ハ)も亦(マタ)青(アヲ)くまじりあいまぐるまでうつ
ちを刈(カリ)取事(トルコト)稲(イネ)の刈節(カリフシ)あり万葉(マンヨウ)に秋(アキ)の田乃穂田(タノホタ)を刈(カリ)
ねつゝよいあんばいに彼(カノ)をとり此(コノ)をとさゝやかなる稲田(イナダ)の穂

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

に出るを穂田といふ刈ざるハ刈を待ほとよりかゝるを云
又毛詩小雅章寄田家百姓詞歌に田を刈にはつゝを
家うをはらすくにうらすて稲ハ多にある稲うらくハ已と云詞なり
○或田低田ハ稲株を高く刈ときハ土沙にうづまりて糞垢
多まわ株を赤土となりて高く茂なり又或ハその例の事
心得ゆるが試たる早刈稲ハ九月十四日に刈たる此籾
一升三百目摺て五合七夕あり同し田を廿日遅く十月
十三日刈たるハ一升二百九拾匁摺て米五合二夕あり
是一升の中にて廿日早く刈たるハ量目拾匁摺て五夕
多きに米の質よく砕ざるが故也といへり且又寒田ハ

特に早く刈取し稲根を干し地を乾かして麦を蒔入る
時ハ畑麦に劣らず結実能熟すといへり西南の地ハ
刈時を徹見ぬもその田のにハ常に遅く延したると覚ふ
るためしあれバ少しハ時節よりはやくおくれじ昼
秋かけてぞきき業なり徹書記斎に眺ある秋田刈たる
ハ村雲の如くぞ時まや月代見ゆらん此斎よく田家の
刻しき様いひ時へてあきれなるかし九月中旬ハさも
ら稲の刈時にて父母妻子田場に下趣月のはなるま
とかかる夜田を刈なれバ月をとへ待てはいとまなき
を雲の如くまて晴くなりまとの見えざりおどる仰で

月をうそぶきて八雲よ民の勤労に就の體字(ツケル)
世の憂きをぬぐひ去て淳の朴の月をも眼いるゝまで
月を仰きみてからのやまもの歌うたひ酒肴抱まで吸ものをえ狂風流
ゆるしてむすめをおもひ孫まごをおもふ
しへ農業よりも甚事を謀(ハカル)しうちはたの考せざるべし

稲積(イナヅミ)出雲風土記神門郡稲積(イナヅミ)山大神之稲積あり今正月朔夜ゟ
義まして祝詞
らいつり
穂積(ホヅミ)古事記人名穂積(ホヅミ)あり東鑒穂積(ホヅミ)荘預
穂積所維度ゟゑゟり穂亦稲穂ゟり

古頭美新撰字鏡

○蓋(ケダシ)来積(ツム)稲聚(イナムラ)夫木集序嗚てうたひ穂ゟぶし
もゝの秋乃稔ゟまよまくらめ

登場詩幽風九月築場清耕織圖譜牧禾圃曰場物生之時
則耕治以為圃而種菜茄物成之際則築堅之以為場
而納禾稼(ホカ)庾(ユ)毛詩註露積曰庾積粟
或作(ニ)穮(ホ)穰(カリ)也又露積之禾曰庾
亞積禾也

積苫(ツムトマ)三才圖會○農桑直説云作苫用穀草黄
也積苫ハ稲積の覃(オホ)ゟり
野草皆可凡露積須苫繞益(マヒ)不為雨所敗

蕃名スコーヘン・ヲップスターペレン

稲ハ刈上て忌(イミ)なる磨(スリカテ)掲ハ穀稈(モミワラ)折(ヲレ)そのまゝ
且曬(ツカニホシ)て後束稲の穂穎(ホサキ)を裹(ツヽミ)み圏(コモ)
よく熟(ニ)ゟゝき揺落(コキオト)さゝるなり
稲と積(ツム)累(カサヌ)ゐる事ゟゑゟり
されぞよく田間(タナカ)に在(アル)ものハ雀(スヽメ)鴨(カモ)よく

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

まゝハ俄のみならずあまさへ遺穗をもなく漂流さまよひ或野火を罹て焼亡し希ゝ露史の災ゝ遇をあり穀ハ火ゝ焼まざれぐゝも雷ゝ撃ゝその硫黄の臭氣ありて食ふべからず淡海志ゝ西近江ゝ墾田ところ〴〵あり湖のゝ溢る時ゝ穗の稲ゝ流ちじと墾く故ところや稲機三代類聚格〇夫ゝ集經信の秀ゝよくいろ〳〵稲機田の上のいふところのあらそれるものなり稲木和訓栞稲を懸るをいふ四國をよにるさとまろ

麥笕三才圖會笕、架也若、麥若、稲等穫而束之悉倒其穗控於其上

蕃名

三代類聚格曰承和八年閏九月二日敕大和國宇陀郡人田中播縣曝種穀之燥似當火炎俗謂之稲機今諸國往ゝ所有在焉宜仰諸國廣此器專利之不得誅畧今按ゝ稲機ハ今の稲木なり〇又出雲風土記神門郡桦山大神御稲桦也とあり土佐の春水ゝ歌ゝ掛てあり門田の稲未ゝ苅ゝ年有民の秋ゝ飯ゝ〇むら〳〵苅ゝ稲ゝ穂といふものは稟實並刈者なりとをもふ歌詞ゝ苅者ゝは苅ゝ穫る稲ゝをもふ苅ゝ穫ゝ稲ゝをもふみ安くなりきゝ又穿ゝうけなどゝて日ゝみあり〇毛詩朱註凡禾者穀連稟秸之總名也此云苅穂乃ぐとは即禾ゝをもふ又穫乃字和名鈔引四聲字苑穫苅把數也廣韻苅禾把數也

又曰田野ゝ所謂桟稲奥の磐井郡束稲山あり西行みちのくのたびゝ詠ゝ歌ゝ山乃さくら花よりハ嶺會桟ゝ束同縛也又曰稲手ゝ波ゝ渋海志ゝ玉ゝ多ゝや返江の須乃いなそばと

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

ゆるきの杜乃かげ　詩小雅此有不斂穧之
乞し穧字をは穫讀ていおたゞ禾と
叫多上世ハ租稅皆刈穂のまゝみ
か稍某束某把とのミ云ゝう續紀天平十七年制曰諸
國公廨大國四十万束上國三十万束中國二十万束
大隅薩摩両國各四万束云ゝ風土記残編ゐ公載某丸假
粟某丸ゝふおとゝりゐ丸ゝハ俵ゐ
加茂御田植の狂言ゐ今年種まきて秋の稲ハ何束
を收むゞゝとゝもハ古言ゐ當今ハ我南島の民皆刈
穂ゐく稅倉ゐ納め給ゝり其數量ハ大攝政をく經重
度里多少ゝ知るなりゐ掬三代實録曰出羽國元慶二年

夷虜所燒盜穀穎三十二萬五百一束六把八分六毫糀七
百五十斛と見えゆり其束把ゝ計るゐと今の糙米の抄撮と相同しや之ゝ拾芥鈔ゐ考ふる
十窪為レ毫十毫為レ分十分為レ把為レ束又曰六銖為一分
四分為一両十二両為一斤小一斤也三斤
為大一斤四十八両也大十斤為稲一束一束一斗米舂五
升是一升耗の積ありゐ見ゐく中古以前の稲乃束把の斤目の量ゝ
知るゞし古要ようけ稲の秤の石の重くそもとし八
氏のられゝとゝりゞゐ今西清乃租稲ゐ秤ゐ粒稲と刈租ゐくそなゐ
ゐゞゞ孔皆穀ゐく杠秤ゝ為ゐて斤目ゝ度ゞれほとゝゐ

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

その米仃量を用て直をきめたといつ凡百仃四方の四社より第一斛八斗二百五十仃を奉るといつ

毛美古事記○即穀子也俗籾の字を用う元正紀霊亀二年の詔に「又諸國風土記の残編をよくくらべ蓋和字なり玉篇音尼とも米乃衣新撰字鏡穀禾字典凡穀皆曰禾説文穀百穀之總名毛詩朱註禾者穀連稾結ヲ之總名稲秫菽粱之屬皆禾也稲凡禾ノ者穀也佛體弁水誘綺子穀子舎利慈恩經疏舎利者稲穀也佛體大小如二稲穀量故以為名矣

蕃名パアジイ

毛美とは田成物實ということ著名なり一説に萌實

也其實の萌発をもていつ又毛美とは真實なる穀實小粒なるの義なりあるいはくくるの義ともいふ応神紀に茅野の國樔蝦蟆を上味とゝ名て毛蒲といふ毛美ハ旨と通ひ一ツ所の方言と味かきたいふ名なり

類聚方ふ天地間之衆味米第一云々○續紀養老三年制曰穀之為物經年不腐自今以後税及雑稲為穀收之夫皇國ハて毛美といふ稲子をもて祝詞ふ荒稲とゝえくり盖五穀の属唯稲を最上ゝして他穀ハ俗ふ近と雑穀と称ふなる五穀の外先此ものを表出ゝ○天智紀元年春正月稲種三千斛賜百濟八年三月賜馳羅國王

五穀種子（たね）といえども夫吾邦の稲穀は五方の種よりも實（みの）ることすぐれり。異國より實来を求めし例多し。因鎮西の稲穀と宋へ渡をもとめ時頭朝卿乃稲穀を栗實と書まどはせるを定副卿のはのこゝろは何ごとぞと嗚（あざけり）ることなりしといえるをもて頭朝卿とがめて諱よ。八雲衆穀の大名みな栗の字をもて終（おわ）りたるゆえなり。本草時珍云古者以栗為黍稷粱秫之總稱而今之栗在古但稱粱（栗部）古事記傳曰さく皇御國の萬の物を事（つか）へ奉（まつ）るに優（すぐ）れる中にも稲は殊に

今日（こんにち）まで實の国（くに）なればこそ神代より縁（ゆかり）ある所（ところ）由（よし）なれば諸人（もろびと）かく悦（よろこ）びて祭（まつ）るぞかし。況（いわん）や稲粢（とうし）を粢盛（せいせい）ふるに皇神（すめかみ）の恩頼（みたまのふゆ）を思ひまでよりなき紀洲国のたとえおろかなるはいうもさらなり。○さて稲を刈り終（おわ）りて田（た）の畔（あぜ）をなら場（ば）なども設（もう）けたるうちは竹（たけ）管（くだ）みて挾（はさ）み捧（ささ）げもちて引（ひき）ぎ穂（ほ）を薦（むしろ）よりも勲（ほうび）穫（え）まで終日（ひめもす）歩（あゆ）み来（き）て床上（ゆかうえ）竹（たけ）挿（さし）おのく穎（えき）毛（け）と揃（そろ）ひ突（つき）ふるを是（これ）をぶ搗（かち）ら〻ぬ次（つぎ）も芒（のぎ）毛（け）とて粗籠（あらこ）みくゆ

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

是透し穀の塵芥を去り除く又再び筵に攤げ曬て礱に
て穀殻を磨り破りつゝ或箕或米篩にてゆり出しつゝまだ
稃は上に浮き米は底に落る其中未磨ざるものは幾度
も是を磨く引破るなり今は千斛通てふものにて荒稃粗残
本米とも三段に篩しわくる用急甚工夫を省くなりされて残
さねなく磨とげらる時通箕に入まかく其羽末を精やば
米は外に落出く稃はさ起横に扇き飛びく米と稃二段
に分るなり是にして刈おさむる稲穂始て米となるもの
みは浅き法なり其一とくに米と浅までを刈おさめ乾おさ
お搗おけ磨おけ簸おさむるまで其工夫次第始をも

措がたく時に及びて風雨の損壊穫収の耗失なくやう
に備ふ艱難をはくして百折千磨の業なれば筆言には
殫く述がたし○あるがいたく農の力勤ども世におそれ
あるは何かしと称するに傍よろまぶしうの息をつきあ
つぎて潜する蜑のうき沈む業にくらべ視るに陸の勞は
命を白波にかけて失ふなどのかなしき憂目はなきを何く
ど唯及ぶるまじん堪がたき蜑のわざならと謂にもいむなる
ひとをおそろしけまいづまり安済る道の常やまずを
はあるとかくもう高き業におもひかへて大本をしを
報まある一とゝせに二度乃仕付取上をんにかけて働

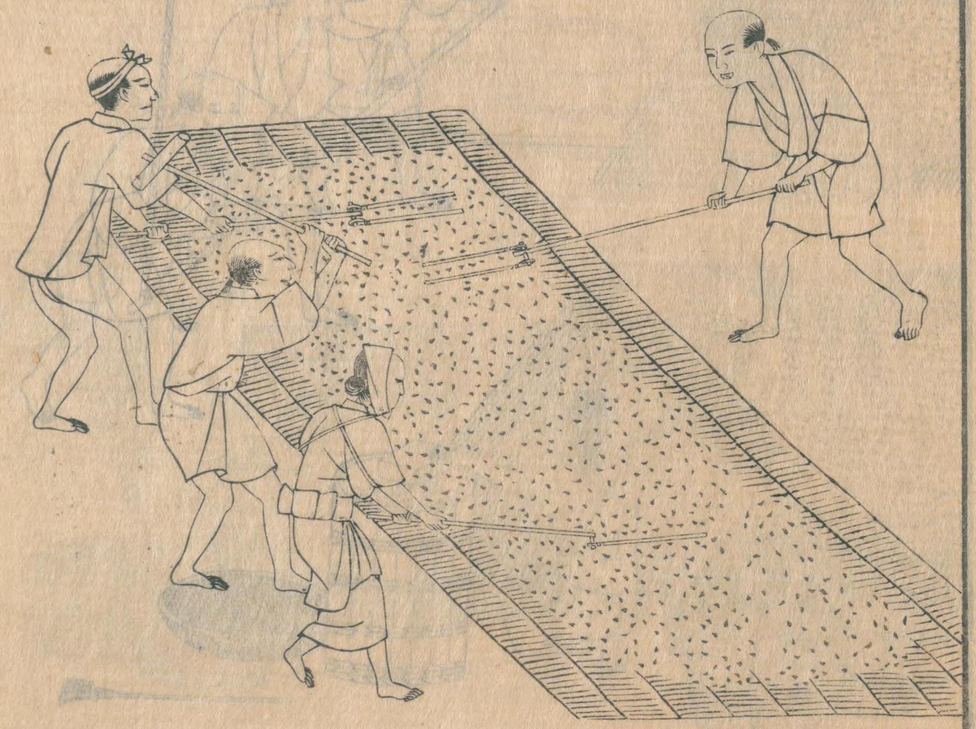
成人稲狩(ニギ)ちとそろく稲の実りをや と問ふまば

おの稲け
高あさ
仲の
うるわ女
かきこと
もりて
ざくざ
かおしき

くべしはくばかり体(イタカ)総しき中よ
里そよ年月つめば近くをえよ
情して頼て稲こぐを待ふど
此ろどのいとまなきたうとま
かく人ちまぬむいおとの雪よ
ろい我ふぐ甚といすねぞ丹づ
今年のわらやうるが磴(スルス)乃猪
逃臼のきをいのしら鼻(イビヤ)軒よかもり
ちの月おはきよなりて秋ひと
れ里へ来ぶ色をおりよが
```
```

清耕織圖

南畝秋
来慶阜
成曜
曜未
釋老
農情
霜天曉
起呼
鄰里遍聽
村々打
稲聲



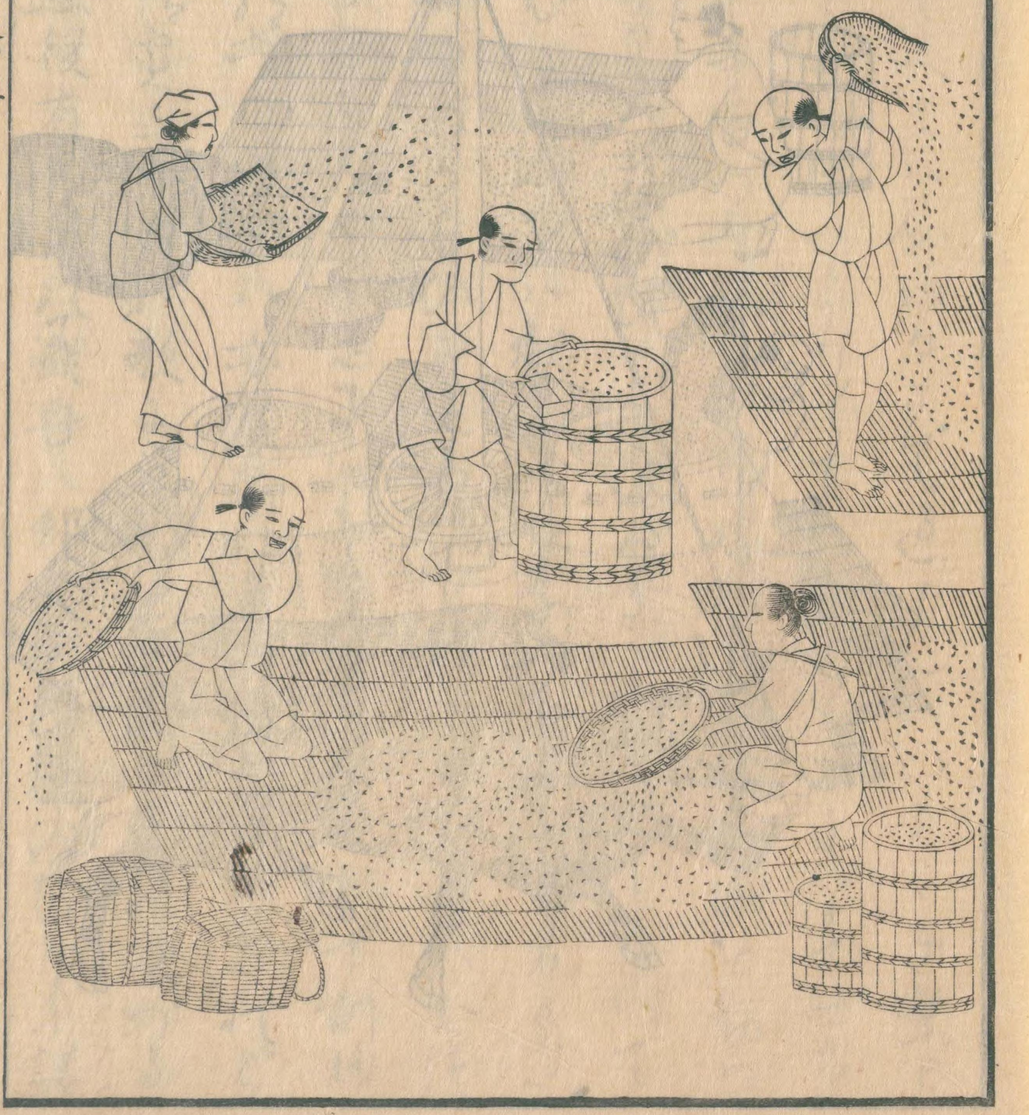
国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1

ガラス使用

田家行

王建

男聲欸乃女顏悅人家不怨言語別五月雖熱麥風清簷頭索索躁車鳴



野蠶作繭人不取葉間撲秋蛾生麥牧上場絹在軸的是輸得官家足不望入口復上身且免向城賣黃犢田家衣食無厚薄不見縣門身即樂

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1

ガラス使用

淺柏原天皇

小車に
きゞ
牛れ
くるし
いつまで
めぐる
日し
なる

ふとあるとて人はいかゆるさでもさんいこーき業と
も物ゆもど女の中つまりくてハきの
ハりられど辛苦（タシナ）つて嫁（ナカタイ）よう嫁入（ヨメ）て淺い織と勤め
営（イナ）む農（ウト）たぐもろ起（オ）びなしてぶ
女の男擬むよハんをハ欲よ人をみそかーと男さぐ
めんハ父母のはゝらひは迫めべし我ともく合ひ
るやハいりみもくやきすてをりちんと十訓抄
よ志ほし給（タマ）ふの時（トキ）るハ亦農家壮者（カモノ）の海（ヨミ）もめりされど
熱田人の情実（ナサケ）られハ和歌よ志給ふをもて四まれて次づる
小有天地無後有男女礼義吾邦天の浮橋のむ一諸

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1

ガラス使用

冊唱和の調に起りて造端於夫婦の義を設あり此歌の
情を失はず忠孝を尊く求ふく礼義も教ふらじ後浅
く悪ければ人ハさくろをならはすまし抑これあられハ是
よりぞし諸万葉集にハ恋の歌を相聞と號て妹背の事
をうひ乃こふるびに兄弟朋友のみやびをかいそまでと
今られられバ五倫にわたりてこゝろ得べきことにや
志られども男女れ皆淫風に奔逸猥褻に流れて帰る
道志らざるハ太に成もぐし万葉集ハいさはすらゆき
守はるべき丈夫とけ云てやとのは後の偽あり此一首
までおく慎むべきなけり

與禰 古事記○土佐日記など與祢とあかりありせ
醫心方に云祢乃与禰とうちいふそれさしれ是
古免 同上 和稲 延喜祝詞式是荒稲に對へいへり 多太與禰 水艸和名
八木 東鑑又俗に八十八の壽を賀て米と祝るにとあれ
八の数ハ吾人殊に貴ぶ所にして且米の折字八八
十八なるによりて八十八
と米の年といへり 齱牙 朗詠集
米 和名抄引切韻米穀實也説文米象禾實之形註顆粒也
十其稃彙開而米見也八八米之形とあり今米と八木
と書くは是を此ちるより出きたるなるべし 又 白粲 前漢書註擇米使正
日本風土記に倭國十二支之巳曰米
白為白粲杜詩精鑿傲 玉粒 杜詩玉粒足晨炊紅鮮任霞散
白粲是白米の名なるを 紅鮮 見上
雲子 洪駒父云雲子新炊滑溜匙又飯をも雲子といふ 薌珠 名物方言
蕃名 レイスト

凡五穀の實ハ皆米なるといへ稲米と與稗とふ
稽說な與ハまちまち殊なり稗ハ種の畧ふてまた種
なふといへども總米と與稱すれは稲とふ
物洗ふり根と稱ふい苗と奈返ふふをおれし古兒
ふは蓋奇實なふふで久と古ハいみしへ通へ里後ハ俗
通して古兒と稱ふもの皆稲米に係ふて稲米を粒大
く舂て碎缺を精て白く堂ふしたる炊きて味旨く殖信よを
第一ふる東鎚の麝香米ハ光粳米也ふいつを凡上田の
米ハみく圀く色蒼黒くして舂糠多ふて田の米ハ粒
大ふして糠のごとく白し舂て耗ふり又上田の米一文

日の重さみて二百粒百八十顆ハ微多少ありて下田の米
ハ一文日ふ二百粒の多少ありて

飯穂古事記○書紀人の名ふ飯粒ありて
米粒是生穀のふり
飯粒是熟飯のふり
粒音立古文作粮字典米粒也說文糗也書悉民乃粒傳米食ヲ曰粒疏今人謂飯為米糗遺餘之飯謂之一粒両粒是米食ヲ曰粒用米ヲ為食之名也

蕃名コルレ・レイスト

凡豆ふて實ふる者ふ音ふ俗語ふはいつふふ粒ふ
凡粒ハ圀く大ふふと完上ふて

一なるべき毛を蒼白紅殷黄淺黒そのの種一なるべき
雪物語ふ正月廿四日杜尾の神今明の
まうで神祇伯ととのへてれまわの夏やの麥
の根と根ふして千根こせる、ゆ粘ゆ乃中ふ入てこと
粘ゆハ也種の麥乃汁ふるに又今月廿日ばわの
ままぜてとこの今朱仔ふぞの法國の繻を取なうへ
るとのハ朱粒と並相てこれくふ
栗そと覺ゆるゝ十ふ一ッを經ぞ
まゑでし又粮運夫ハ儀の粒主とさゞ志こそ入寛と斛
ふ合撮を呑ざる法このまゐり○和訓栞曰式の志摩国

ふハ田何ゐど粒何ゐぞ記をり本朝世紀正暦五年十
一月豐前國雨米初如小豆日闌之後頗以減少似破米一
村下人或以取食所拾採二三合許なるものなり

加天古事記○書紀ふ稟をゝ訓めり本朝世紀正暦五年十
ふ請免窈王之罪敵私地而救故号其地曰玉代くの
ま今狩酒代當代ゐどいへり後ふ代七濁音
ふ呼ハ村ゐり沖縄ゐてハ食をゝいへり
袁志毛乃同上神武紀ふハ袁毛乃ともありゐハ
袁須ともゝ米志ともいへり
糧周禮廩人凡邦有會同師役之事則治其糧
與食註行道曰糧謂精ゝ也止居曰食謂米也

扶持米
番名ゲコークテ.レイスト
古事履仲卷以阿知直始任蔵官亦給糧地糧地ハ今の役

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

粮の高地より扶持米ハ兵賦より少く凡其賦ハ百石ニ七人扶持三百石ニ十二人扶持五百石ニ十六人扶持千百石ニ廿五人扶持二千石ニ三十四人扶持一萬石ニ百五十人扶持一萬五千石ニ七百五十人扶持十万石ニ千五百人扶持なり

加禮伊比 新撰字鏡○姓氏録乾飯ヨシカレイヒ

保志伊比 和名鈔○河内志泗川郡道明尼寺所製之糗世謂道明寺天下之絶品也

糒 音避字乾飯也 糗糧尚書○本艸云粟米麦熬過磨作之粗者為乾糗糧

蕃名ゲドロークテレイスト

延喜春宮式糒一斗一升二合五撮いひ〳〵の儲蓄ハ

多ちいひとて蒸ものを今ハ東国ハ此貯あり仙臺糒諸国名高し依て糗法冬月中糯米を一夜水に漬翌日蒸て塊を解き席に薄く擬ひ陰乾かし赤塊を砕き臼にて舂き篩ひ粉となし俗ニ炒ば麨を米とし砂糖と加へ臼に花ひ用る時湯にとき食ふ

焼米 和名鈔 熬米 赤島口ともいふ 扁米 凡晩夏中に早稲と收穫のまく春ひらめくふ

糒 音邊 和名鈔引唐韻燒稲為米也○切韻新稲燒而舂之得米也

蕃名ゲブラアデ.レイスト

東鑑ニ曰節料焼米可為國司徳分今種かの時乃焼米を

国立国会図書館 タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

鳥口ゟ湧ル小字治拾遺の大饗ゟ云鳥
食とおれ〳〵ゟ里○和州平群郡志貴山ゟ里東焼石
ゟて名石と出やり皇極紀童謡ゟ石
ゟ石ゟて米枕と云古史考ニ云神農時民食穀
釋米加ヘ焼テ石上ニ而食之ヲ奥州二本杉
ゟ長者倉ゟ〳〵ゟ焼米ヲ出ル按ゟ三代
實録ゟ夷虜出羽国の穀糒ヲ焼盗ニおとゝえゝゟその
二本杉土中ゟ里出ル焼米ハ此等の遺種ゟゟ雨陽
雑沮乾陀国昔尸毗王倉庫為火所焼其中粳米燋者于今
尚存服一粒永不患瘡又清の周嶼齋因樹屋書影病心者
拾數之即愈ゟの佗陸祚蕃粤西偶記ニ云葛仙米王撫秋燈

叢話云黒米皆此物なり本朝食鑑ニ曰伊勢、荘野、市上造
焼米ハ以青麦艸作俵子裹之ヲ
比米和名鈔○按ゟ比米ハ強飯ヲ対つゝ云姫飯
或説非米非粥之義とハ忌ハ賛筆みぞ海人藻芥
粢類篇煮米為糗○食經作糗法取糯蒸米一升置沸湯
勿令過熟出著新籮内是此間の汲漉飯ゟらん
海人藻芥曰公家御膳飯者強飯也執柄家等加此姫飯全
分器儀也但人々依好惡用之強飯時寺飯湯也而近代姫飯
時を湯ゟぬらせおと云不叶理者也この姫飯ハ今常の
飯ゟて強飯ハ忌飯の事ぞハ万葉集贄問答の歌に觀ゟ
てとゝゟを考へむゟしは上又資萬布て飯炊ゟそと忘れ
下共に忌飯ゟるを知ら
正月一日諸社遥拝之後三献有之次御コハ次ニ北目始こ
の比米始ハ今の暦に告朔の意を遺ゟ命の天ゟ食ハ人
ゟれバ歳首み

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

其始と慎は古の禮なるべし世俗歳旦は芋子羹と茹と式とすれど貧弟王記に據ば姫飯を強飯と同く元日に食初るなどいふし一の格なるべし而と夫妻合歓始などとよぶはわろし又枕冊子に衣いめの濡さるいみじくわろきといへいめは幹衣にハ飯の糊せる者なればかくゐるや或ハ是を今南都の俗に若粥揚茶などいへる粥の事にて昔の飯は粥なるにやと云は甚誤せり漢人の食こそ饔飧に粥とバ羹なき○凡常の飯と煮にせバ毛沸鬻どき磁碗に飯を盛て内の蓋上に居竈の蒸を去バご飯銚熟のことなるを蒸を都り見ま山路などまて飯炊べき器なき時ハ竹筒に精米を六七分ほど十分入口に栓さし筒を火の上にあてゝ旋くころぶれバ筒の中に飯にえるとのなりと

波是米 波是ハ火にて籾を爆ることと云俗波知也米と云をなちや亦爆なり也是を細末して古賀志とせり

糤 亦作饊説文熬稲粻粻也○急就章云饊之言散也熬稲米飯使發散也古謂之張皇亦曰其開張而大也

粽 亦作餜類篇 爆米曰粽 ○ 孛婁 米花 以上袁中郎集

糤ハ糯米の穀を漬て熬ハ爆脹て稃自脱去り色潔白也

又糯の精米を蒸し曬て舂離し細沙を雑へ炒ゞバ焦れざ而篩て沙を去也沙糖に和食に粉して餌餻に調ふ

穀米

搗稲 以上漢語鈔　黒米 貞観儀式

糙 或作𥽇䊪字典 粗米未舂和名鈔引本朝式為糙者舂稲成穀之名也 杜詩 秋苽成黒米精鑿儲白粲

番名 ヨンゲスタムプテ.レイスト

穀米とは穀殻を脱せし米なるを云搗稲とは今穀皮と離して挽割をも磨搗の言なり職人画山蔭や木の下庵にくろ米炊月いでてハ松を志るぞあはれ

平精米（ヒラシラゲヨネ）和名鈔○東雅ほひらとは粃平等といふがごとく
くよの淺深のおとくなるをいふ酒なるを糟（カス）といふ
白くきよふ粗平（アラヒラ）半白（ナカバシラケ）今醋（スヅ）あるは醸（カモ）すに少し米を半白（なかばしらけ）
よるといふ雜（キシメ）目（ノ）
糲音厲史記序糲稻之食註一斛（コク）粟舂（ツキ）七
斛米（コメ）為（ス）糲又云五斗粟（アハ）三斗米（コメ）為（ス）糲
糲米謂（ヲ）舂（ツキ）一斛（コク）之糲（ヲ）成（ス）八十之米（コメ）也
烏米和名鈔引食經一名

蕃名

太平十二策ほ　伊勢大神宮ハ三杵（キネ）の供（ソナヘ）御（ミケ）聞食（キコシメス）とは粗（アラ）
平（ヒラ）の米（コメ）なり韓非子ほ堯（ギョウ）之王（オホヤケ）天下（アメノシタ）也糲粢之食と
もゝえぬ古語云人主自奉儉薄（ツヽマシ）天下化（カ）之上（カミ）殘節儉（ツヽマシ）則不
令而行（オコナハ）民俗（タミ）自歸（オノヅカラ）於淳樸（アツキ）上（カミ）下分定（サダマ）億兆志定（サダマ）斯治（オサマル）天下（アメノシタ）之
要道也されバ後（ノチ）の帝皇（ミカド）を倚廬（ヨリド）に御（オハシ）在（マシ）ては女房

夢物（ユメモノ）をつゝて御（オン）飯（イヒ）給（タマ）ふさま白御飯の上ほ黒き御
飯（イヒ）とくさ〳〵するあり黒きハ後乃代のものやまり
もろ〳〵黒きハもろ〳〵ぬるでさま淺聖升公
廉（カド）の亮佐和紗ほどゝもり

精米（シラケヨネ）新撰字鏡

與禰志良具（ヨネシラゲ）同上　白米（シラヨネ）貞觀儀式

粺音稗或作糲精粗粺の三字并白米也詩大雅註米之率
粺十粺九糲八侍御七凡粟五升為糲米三升以下則米
漸細故數益少四種之米皆以三約之
蕃名ゲスメムプデ・レイスト　白米唐六典

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

糳 音作 字糳 左傳作鑿或作 說文米一斛春為九斗
韻會小補粟一斛為糳米九斗春糳一斗為稗九升又去
為糳則八升米之
細者乃窮于御

番名ウイツト エンソイフル・レイスト

米を舂き平らかに神代紀の荒暴の世を治安に属き
おだ平らにとまぜるさま
をおれ崇神紀は精兵八十人
ものは精とつよきを米とを
米となり後舂て精白となり守たと切磋琢磨とつがお
なじ事を又舂いらなどの事で
それと覚えおくべき事の事を精をとるそれから粳の

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1

ガラス使用

是通例の舂米なり駿河國民部省帳を阿兵郡阿兵布無
公穀假粟市間出一斛五升之精米各月兼充国府之處為
厨司之料和泉式部集なの風しのものをきゝぶるとよ
よはそぐらんきゝぶはうるとて里どよみあり西土の米
小此間のごとく臼杵をて舂ハ多く砕破ゆゑ多車
みて搗といふ其脫粉をえるごー
真精米和名鈔○魚逐淫を福の神といひ簡米等黄
古めきゝぶをよんなたらふ
ふるもの缺折ざる全き粒とをえらぶなる
依を御膳米とぶハ即漢の御を尚きう
太白米

上白米東鑑

神功皇后の御宴の酒を醸らんと欲ひて、人を以て、歌曰を教へ給ふ。

いざ子ども、酒は醸さずて、臼に立てし、我が搗く栗の、美酒に、あさず笑みて、飲ませ、ささ。

と歌ひ給ふ。是造酒の童女いみ〳〵しくして、今の世俗のごとし。

近江國晉智郡稲喰翁

うらやまし、やそもの稲をもろ〳〵の、君とにはたく初穂かな

る宋書曰晋平王以短銭一百賦良民登就求白米一斛米粒皆令徹白若有破折者悉刑簡不受○仁徳紀十三年定春米部天武紀ふ春米連といふの是日本後紀云諸國所春年料白米擧百束戸春利十束野府記曰白米千百斛充己為流例所主税寮勘発以租穀混合正税可春進者頃代裁似無其理○事文類聚田樂府序云臼日春米為一歳計多聚杵臼臿中經年不壊名冬春米○耗又古美米ともいつも俗言倍利なり凡物の費るをいふ省ふむるをいふごとし類聚國史ふ今或所司斛斗之外更加耗分糒則一俵二升已上穀亦斛別五升已上とふ今何合耗の言ありふ欠升ともふ穀物の耗分を給

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

入事あり○五代漢隠紀云舊制田稅每斛更輸二升謂之雀鼠耗王章始令謂之鼠耗雀張率傳よんえぬ

白鑒新撰字鏡又式ゟゑ名目類聚鈔曰粢ハ糯米を熟し僅ゟ煮て雞卵の楕長如く作る粢鍾馗ゟ像る

糈音晉亦作粢山海經註祀神之米糧音皇集韻祭米

蕃名ヲンゲ・アレンデ・レイストト

登伎ハ磨なり米を精ぐ㠯の粹なるを一说ゟ齊也

ゟ楽の字志登幾と讀志とハ和名鈔引切韻粢祭餅也と

嚌ときハ潔斎して神を祭るゟり出るたとゑいへ

あるゟば擾をせりみて俗ゟ白米を洗澤て神ゟ享を洗

米とゑい又粳米みて粢燒まて煮ざうと志登幾とゟ

煮ハ即手洗菓ハ黒米まて用う粢ハみぞ白米なれバ

握子とゟ志登幾とゑいへ潔斎とゟ波やちぐの庶幾や

即稲舂女の美乳甚を彼れいてゟ

ゟちんと盖ゟ米を舂ときの相歌ゟるべし又按ゟ和名

鈔引離騷精米所以享神也和名久萬之禰とある八新

撰楽記の熊米みて書紀ゟ神稲久萬之禰と訓受なり和

訓栞曰熊ハ莫なり一说ゟ天熊人ゟ出ゟる是ゟみを東

稲と唐前ゟ進ゟの式楽礼ゟ用ゐるゟゑなり

残稲漢語鈔

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

秳 音活説文作稭和名鈔引唐韻舂穀不潰者也

蕃名

稿ハ穀をいふ稃をさるなり糯と太同小異なり

粗本 新撰字鏡 米䊧 和名鈔 小米 筒落米 米乃粉

糏 音屑作稿訛也和名鈔引唐韻米麦破也舂餘也籸音蔑集韻䊪也 粃 音縶或作粃集韻屑米細者類篇米碎曰栖

蕃名 ゲゴロイスデ・レイスト

是穀を磨て透篩にてふるひたるいさゝみの脱ざれるものぞ小米ハ舂米の屑なり小米ハ飴を造の料によろしき ぞ○飴を製法ハ小米一斗但ふるひはなすべし 小米なければ糯白米を用ふ

錫にてハ小米六斗と本と麦芽一升但磨べし以上二し蘖湯の加減を之に称ふせ品と和削て湿湯二斗五升を入て罨ちるもと一時ほどして後簀をしいて掬にて汁を汲取る是を飴といふ

赤云 水飴 二番汁を復汲取べし此飴と釜にて煎つめたるを膠錫といふ 赤凝煎とも 地黄煎とも 琥珀の色なりせ是を両人桐對て双方に引延にて色白くなるに寒を度となる乃ち錫成也凡飴熟に會ハ錫津る固粗糠を炒て糝とすれバ滓まるへし

志比奈世 和名鈔○今俗志比禰志比奈といふ

志良與禰 新撰字鏡 美與佐 訓蒙圖彙 志良

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

加良

書紀

粃 説文不成栗也 書若粟之有粃

蕃名ヨンベフリユクテ・レイスト

志比奈 世ハ狩稲なりといふなり和名鈔野王按曰穀實但有皮而無米也○貫誼書云昔者鄒穆公有令食鳧雁必以粃吏請以粟公曰夫百姓胸牛而耕曝背而耘勤而不敢惰者豈為鳥獣哉粟食人也何以其養鳥也支奇禽異獣の人食とそみあぐる民より餓莩の色ある八王公の恥とする所なり

奴加 同上 古奴加米糠の畧或ハ穀皮なり

磨滓 荒滓 穀殼 以上並

糠亦作穅粃和名鈔引漢雅註米皮也○穅音糜集韻碎糠也穅說文糠也亦作粇浮

米糠 細糠 以上卿談正音

蕃名セームル

加良とは殻と通ぜる米の殻とそ実の脱そうと指せり○糠の用最少くそ然牛馬と雖ども義そ有り奴加ハ脱也其お願だうべし又先歎の年ハ人糧となす或ハ塩ま和て赤膏とれ又田圃の培養と炊烟臭ま熬ら用う又創傷より糠の脂と油れ雁来瘡ふハ蒜小麦の霜と油勻て塗ら

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

脂ハ搦みく熟逼炒まれば後黒く焦或曰東北ハ地凍ゆく燃るなりそを下ふ脂漉ㇾ淳る
るなし関東の農人多く上方の糠を買肥壅ㇾ益ㇾ
云顧歡所居郷中有學舍歡貧無以受業夕則然松節讀書
或然糠自照晋書云王戎子萬有美名而太肥戎令食糠而
肥愈甚按ㇾ然澤ㇾ介傳ㇾ正保中ㇾ介備ㇾ岡山侯ㇾ官
ㇾ年三十歳左右時ㇾ騎馬隊ㇾ常患體肥漸至於妨起
臥乃謂甲冑之人不能上馬可ㇾ予由是一斷肉食麥飯鹽豉
喫素洒然寢則單被絆身耳夜半輒起躍足跳踏中庭
舞刀槍習撃刺久之竟致疲羸乃止みくのおるるの
よむり八肥漢して碧ㇾ糟ㇾ食ㇾ商人ㇾ似ㇾ
めうとや王萬ㇾ肥うとを患て糠ㇾ吃てまたく
肥ㇾさと銭ㇾ救ㇾ八徒ㇾ口腹ㇾ為のみ
ざるなや織田信長譜ㇾ信長為用力於軍旅時々與
奴婢相交以巨杵舂米ㇾ手ㇾ右人の用意ハ大ひもく
のだと
荒米 故米前年の米をいふぞ 大日經米
虫附米 惡米 毛入米 宇登米
老米 陳倉米 陳廩米以上本綱 粧紅亦同粧字典音秘説文惡米也 陳臭米一曰赤米 蕃名 粢

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

李時珍云米年久者性涼下氣除煩渴調胃止渴治霍亂大渴史記漢興七十餘年太倉之粟陳々相因充溢露積於外至腐敗不可食凡久貯米穀之倉必有鼠穴或為人所發或為水所浸或為雨所濕或為火所燒或為盜所竊或為官所借或為人所負或為人所侵或為人所奪或為人所欺或為人所誤或為人所陷或為人所害或為人所殺或為人所埋或為人所藏或為人所隱或為人所匿或為人所逃或為人所走或為人所奔或為人所避或為人所遁或為人所去或為人所來或為人所往或為人所歸或為人所還或為人所復或為人所再或為人所三或為人所四或為人所五或為人所六或為人所七或為人所八或為人所九或為人所十或為人所百或為人所千或為人所萬或為人所億或為人所兆或為人所京或為人所垓或為人所秭或為人所穰或為人所溝或為人所澗或為人所正或為人所載或為人所極或為人所恒河沙或為人所阿僧祇或為人所那由他或為人所不可思議或為人所無量無邊或為人所阿僧祇劫或為人所那由他劫或為人所不可思議劫或為人所無量無邊劫或為人所阿僧祇劫或為人所那由他劫或為人所不可思議劫或為人所無量無邊劫

成形圖說卷之五終

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1

ガラス使用